

平成 26 年 4 月 28 日現在

機関番号：43601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520285

研究課題名(和文) エマソンの後年期の思想研究

研究課題名(英文) A Study of Emerson's Thought in his Later Years

研究代表者

高梨 良夫 (Takanashi, Yoshio)

長野県短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：50163225

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：エマソンの思想研究は、これまで超越主義思想を展開したとされる青年期～中年期を対象とするものが主流で、エマソンは後年期においては、アメリカ社会の急速な変化に対処することが出来ない、時代遅れの思想家になっていったと考えられてきた。本研究では、(1)自然観・人間倫理観、(2)プラグマティズムとの関係、(3)ニーチェの思想・文学との類似性、(4)南北戦争後のアメリカ社会との関わり、という四つの視点から、エマソンの後年期の思想の実相の解明することにより、エマソンの思想の全体像を提示しそうと試みた。

研究成果の概要(英文)：Generally speaking studies on Emerson's thought have been conducted concerning its development of Transcendentalism in his younger and middle age. It has been considered that Emerson in his later years became a thinker who could not keep up with the rapid change of the American society after the Civil War. In this research project, the whole aspect of Emerson's thought is attempted to be examined through the investigation of his thought in his later years from the four viewpoints: his idea of nature and human ethics, the relation to Pragmatism, the resemblance with Nietzsche's thought, and his participation in the American society after the Civil War.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：米文学

1. 研究開始当初の背景

我が国の従来のエマソン研究は超越主義思想 (Transcendentalism) を展開したとする青年期から中年期にかけてのものが主流で、エマソンは後年期においては、南北戦争後のアメリカ社会の変化に対応することが出来ず、青年期に頂点に達した超越主義思想の発展は 1847～48 年のヨーロッパ旅行を契機にして事実上終わり、その後は「後退」し、時代遅れのものになっていったと一般的にはみなされ、後年期の思想についての本格的な研究はほとんど試みられてこなかった。

しかしながら米国では、*The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson* (1960-82) が完結し、また *The Later Lectures of Ralph Waldo Emerson* (1995)、*Emerson's Antislavery Writings* (1995) などの第一次資料文献が刊行され、エマソンの後年期の思想の展開の実相に関しての本格的な研究を可能にする条件が整備されてきている。また「社会改革家」としての後期エマソンの側面を描き出そうとした Len Gougeon, *Virtue's Hero: Emerson, Antislavery, and Reform* (1989) に代表されるように、後期エマソンに関する研究も進展している。

それ故エマソンの思想の全体像を理解する上でも、エマソンの後年期の思想に関する研究は重要であり、学術的な意義が大いにあると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで本格的な研究があまり試みられてこなかった、エマソンの中年期から後年期にかけての思想の展開の実相を解明し、エマソンの思想の全体像を把握しようとして試みながら、その重要性と現代的な意義を明確にすることを通じて、エマソンの再評価を促すことである。

エマソンの後年期の思想研究の具体的内容としては、(1) 自然観・人間倫理観の展開、(2) プラグマティズムとの関係、(3) エマソンの影響を受けたニーチェの思想・文学との類似性、(4) 南北戦争後のアメリカ社会との関わり、を明らかにするといった主として四つの視点からの研究計画から成る。

3. 研究の方法

- (1) エマソンの後年期の思想に関する文献である日記、作品、講演、書簡等を精読し、思想の展開の実相を考察した。
- (2) 夏季休業中 (2011、2013年) にはハーヴァード大学の各図書館を中心に調査・研究、研究資料の収集を行った。またエマソン研究の権威ハーヴァード大学 Lawrence Buell 英文科教授と本研究テーマに関して意見交換を行った。
- (3) 会員 (2011年からは理事) となっている米国エマソン学会のエマソン研究者と本研究のテーマに関して意見交換を行った。
- (4) 日本英文学会、日本アメリカ文学会、アメリカ学会、日本ソロー学会などに出席し、特にアメリカ・ロマン主義文学・思想研究者と本研究のテーマについて意見交換をした。
- (5) ほぼ毎月東京で開催されているキリスト教神秘主義思想の研究会に参加し、エマソンの思想を欧米のキリスト教神秘主義の流れのなかに位置付ける試みを続け、また英米、ドイツ、フランス思想・文学研究者、宗教学研究等と意見交換をした。
- (6) ほぼ毎月上京する機会を利用して、エマソン、アメリカ超越主義文学・思想などに関する研究資料の収集等を行った。
- (7) エマソン、超越主義文学・思想、アメリカ思想・文学・宗教に係る図書等を購入した。
- (8) 長野県短期大学付属図書館と他大学図書館との図書館間貸借制度を利用し、本研究に必要なエマソン、アメリカ思想・文学・宗教関係の図書、雑誌、研究資料を借用し、必要箇所の複写をした。
- (9) 研究成果をまとめ、論文を執筆し (2010年)、また研究代表者の論文が掲載された研究書 (共著) を出版した (2010, 2012, 2013年)。
- (10) これまでの研究成果をまとめて、エマソンの思想の形成と展開に関する研究書を出版した (2011年)。
- (11) これまでのエマソンの思想の形成と展開に関する研究書に基づいた博士論文の審査を、東洋大学大学院文学研究科で受け、博士 (文学) (論文博士) の学位を授与された (2012年)。
- (12) 米国で英文研究書を出版した (2013年度)。
- (13) 研究成果をまとめて学会で発表し、エマソンの後年期の思想の重要性と現代的意義を提示した (2010年)。

4. 研究成果

本研究課題における研究の目的として挙げた、エマソンの後年期の思想研究の(1)~(4)のそれぞれの研究成果について以下に記してみる。

(1) 後年期の自然観・人間倫理観の展開
共著『スピリチュアリティの宗教史』(2010年)に収録された論文「エマソンとSpirituality」においては、エマソンの思想の“spiritual”な側面に注目しながら、エマソンが「精神」の根源を宇宙自然に求めながらも、道徳的实践を通じて発現する「力」「動き」と考えている点を指摘した。

著書『エマソンの思想の形成と展開』(2011年)の序章第4節のエマソンの中年期から後年期にかけての自然観、第2章第3節の「慈愛に満ちた動き」(beneficent tendency) についての箇所においては、中・後年期のエマソンが、進化論的自然観の影響を受けながら、青年期の超越主義的な「自己」中心主義から脱却してゆく過程を詳細に論述した。またエマソンが中・後年期においては、「自己」を万物の中心に位置し、精神の自由を運命と対立するものではなく、運命を必然的なものとして自らの意志で受容し、愛 (love) を宇宙全体に調和と統一性を与える「力」(power) ととらえている点も指摘した。

また『ヘンリー・ソロー研究論集』に掲載した John T. Lysaker and William Rossi, eds., *Emerson and Thoreau: Figures of Friendship* の書評(2012年)においては、青年期においてはエマソンを師と仰いでいたソローが、エマソンの思想の影響を受けながらも、次第に離脱していった過程は、エマソンの後年期の思想を理解する上でも参考になると指摘した。

さらに共著『ソローとアメリカ精神 米文学の源流を求めて』に収録された論文「運命、本能、力 エマソンの後期思想の考察」(2012年)においては、エマソンが後年期において運命、本能、力などのテーマをめぐって展開した、自然と人間精神の働きの関係についての思想の特徴を、青年期の超越主義思想と対比させながら、『処世論』(*The Conduct of Life*) や後期講演集などの原典に基づきながら論述した。

(2) プラグマティズムとの関係

論文「米国におけるエマソン研究」(2010年)においては、米国における1980年代以降の「脱超越主義化」を推進したとするエマソン研究は、Stephen Whicher が指摘した、自然に内在する「力」(power) の希求等の後年期のエマソンの思想の解明を一層進展させていることを指摘した。

学会発表“Emerson's Acceptance in Meiji

and Taishō Japan”(2010年)においては、エマソンが青年期に展開した超越主義思想に影響され、「自我」と「内的生命」を探究した北村透谷等に対し、徳富蘇峰は、エマソンが中・後年期に展開した実際の・現実的な思想に注目し、広く国民に紹介した点を明らかにした。すなわち我が国では、中・後年期のプラグマティックな思想を既に明治・大正期から受容していた歴史的事実を指摘した。

また論文「エマソンとウィリアム・ジェームズ プラグマティズムとは何か」(2012年)においては、ウィリアム・ジェームズ著『プラグマティズム』に記載されているプラグマティズムの特性との共通性を探りながら、エマソンをプラグマティズムの先駆者として位置付けようと試みた。

論文「エマソンとジェームズ 宗教観をめぐって」(2013年)においては、ジェームズ著『宗教的体験の諸相』の内容との比較的考察を試みながら、主として宗教観の視点から、エマソンをプラグマティズムの先駆者として位置付けようとする試みを続けた。

さらに共著『アメリカン・ルネサンス 批評の新生』(2013年)に収録された論文「エマソンからジェームズへ プラグマティックな視点からの考察」においては、エマソンの特に後年期の思想の展開が、ウィリアム・ジェームズの思想と直接的に結びつく側面を持っていたことを論証しようとした。

(3) ニーチェの思想・文学との類似性

論文「米国におけるエマソン研究」(2010年)においては、米国における1980年代以降の「脱超越主義化」を推進したとするエマソン研究は、ニーチェの思想との類似性など、後年期のエマソンの思想の解明を一層進展させていることを指摘した。

また著書『エマソンの思想の形成と展開』(2011年)の第3章第3節では、エマソンの「大霊」(Over-soul) とニーチェの「超人」(Übermensch) の比較を試み(215-17頁)、ニーチェに対するエマソンの影響と両者の思想の類似性を指摘した。

さらに英文著書 *Emerson and Neo-Confucianism: Crossing Paths over the Pacific* (Feb. 2014) の Chapter 2 においても、エマソンの“Over-soul” とニーチェの“Übermensch” の類似性を指摘した (p. 67, pp. 171-72)。

(4) 南北戦争とその後のアメリカ社会との関わり

『英文学研究』に掲載した Philip F. Gura, *American Transcendentalism: A History* の書評(2010年)においては、1840年代から1850年代にかけての超越主義内部での自己教養派と社会改革派の分裂と、霊的から実際の超越主義への変容について論評した。ま

た1850年のDaniel Webster の上院での演説を契機に、奴隷制度廃止運動等のアメリカ社会の現実にも積極的に関与するようになっていった、エマソンの後年期の思想の特質を指摘した。

また著書『エマソンの思想の形成と展開』（2011年）の第1章第1節「牧師から講演者へ」（64-74頁）においては、当時のアメリカ社会の急激な変化に直面したことに起因する自らの内面的自己と牧師としての職業的自己の葛藤を明確にし、第2章第5節「平天下と平和」（177-86頁）においては、南北の対立が激化してゆく1850年代のアメリカ社会の情勢と南北戦争という国家の危機に直面して、新たな人間倫理を説いた講演活動などを通じて、アメリカ社会の現実に積極的に関与していった点を指摘した。またエマソンの平和観、公私観についても論じた。

さらに英文著書 *Emerson and Neo-Confucianism: Crossing Paths over the Pacific* (Feb. 2014) の Chapter 3, Section 1 の“Equilibrium and Harmony” and “Peace” においては、特に後年期のエマソンを倫理思想家、社会批評家として位置付けようと試みた。

(5) その他

著書について

単著『エマソンの思想の形成と展開』（金星堂、2011年）は、長年のエマソン研究の成果をまとめたもので、本研究課題に限定された研究成果とは必ずしも言えないが、序章第4節のエマソンの中年期から後年期にかけての自然観、第1章第1節「牧師から講演者へ」、第2章第3節「慈愛に満ちた動き」(beneficent tendency)、第2章第5節「平天下と平和」、第3章第3節の「大霊」(Over-Soul) とニーチェの「超人」(Übermensch) などについての箇所は、本研究課題の直接的な成果である。

本書は「週刊読書人」(2011年8月12日)、「アメリカ文学研究」(第49号)、「アメリカ学会会報」(No. 177)、「東京大学アメリカ太平洋研究」(第13号)、「ヘンリー・ソロー研究論集」(第38号)、「フォーラム」(ナサニエル・ホーソン協会、第18号)、「比較思想研究」(第38号)などで書評の対象とされ、さらに本書に基づいた博士論文審査を東洋大学大学院文学研究科で受け、2012年3月に博士(文学)(論文博士)の学位を授与された。

英文著書 *Emerson and Neo-Confucianism: Crossing Paths over the Pacific* (Feb. 2014) の内容は、『エマソンの思想の形成と展開』と重複する部分が多いが、英語圏の読者を想定し、エマソンの思想と新儒教の教義との比較的考察に焦点が当てられ、構成も大幅に変更されている。本書も『エマソンの思想の形成

と展開』と同様、これまでの著者の長年の研究の成果であり、本研究課題のみに限定されたものではないが、Chapter 2 における、エマソンの“Over-soul” とニーチェの“Übermensch” の類似性の指摘、後年期のエマソンを倫理思想家・社会批評家として位置付けようと試みた、Chapter 3, Section 1 などは、本研究課題に直接的に関係した成果である。

またハーヴァード大学英文科教授の Lawrence Buell は、本書へのForeword において、“This book takes an important first step in correcting a long-standing imbalance in Emerson studies. Scholars in the West have assumed that Zen Buddhism was the medium through which Emerson’s writing and ideas reached Japan during the late nineteenth century. Professor Takanashi, however, argues persuasively that not Zen but Neo-Confucianism was the crucial conduit.” と記している。

米国での研究・調査などについて

本研究費補助金を受けて、2011年の夏季休業中にはハーヴァード大学で調査・研究の機会を持った。特にエマソン研究の権威 Lawrence Buell ハーヴァード大学英文科教授、ピューリタニズム研究の権威 David Hall 同大学神学部教授と意見交換が出来たことは有益であった。

また2012年1月からは、アメリカ・エマソン学会の理事に推挙され、アメリカのエマソン研究者と従来以上に意見交換の機会を持つようになった。

さらに2013年の夏季休業中にも、ハーヴァード大学で調査・研究の機会を持った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件、内学術雑誌に掲載した書評2、発表要約1)

高梨良夫、エマソンとウィリアム・ジェイムズ — 宗教観をめぐって、長野県短期大学紀要、査読無、第68号、2013年、73-82頁。

高梨良夫、エマソンとウィリアム・ジェイムズ — プラグマティズムとは何か、長野県短期大学紀要、査読無、第67号、2012年、69-78頁。

高梨良夫、(書評) John T. Lysaker and William Rossi, eds., *Emerson and Thoreau: Figures of Friendship*, ヘンリー・ソロー研究論集、査読有、第38号、2012年、74-76頁。

Yoshio Takanashi, (Abstract), Emerson’s Acceptance in Meiji and Taishō Japan, *The International Association*

for *Japan Studies: Newsletter*, No. 7, 2011, pp. 12-14.

高梨良夫、(書評) Philip F. Gura, *American Transcendentalism: A History*, 英文学研究、査読有、第 87 巻、2010 年、82-87 頁。

高梨良夫、米国におけるエマソン研究 — スティーブン・E・ウィッチャー『自由と運命』を超えて、長野県短期大学紀要、査読無、第 65 号、2010 年、109-16 頁。

〔学会発表〕(計 1 件)

Yoshio Takanashi, Emerson's Acceptance in Meiji and Taishō Japan, *The International Association for Japan Studies* (国際日本学会), 2010 年 10 月 2 日, 東京工業大学。

〔図書〕(計 5 件)

Yoshio Takanashi, New York: Palgrave Macmillan, *Emerson and Neo-Confucianism: Crossing Paths over the Pacific*, Foreword by Lawrence Buell, 査読有, February 2014, pp. 1-193.

高梨良夫、他、開文社、アメリカン・ルネサンス — 批評の新生、2013 年、「エマソンからジェイムズへ — プラグマティックな視点からの考察」, 査読有、77-96 頁。

高梨良夫、他、金星堂、ソローとアメリカ精神 — 米文学の源流を求めて、2012 年、「運命、本能、力 — エマソンの後期思想の考察」, 査読有、269-83 頁。

高梨良夫、金星堂、エマソンの思想の形成と展開、2011 年、査読有、1-312 頁。

高梨良夫、他、スピリチュアリティの宗教史(上巻)(宗教史学論叢 第 15 巻)、リトン、2010 年、「エマソンと Spirituality」, 査読有、119-43 頁。

〔その他〕

(ホームページ等)

<http://www.elsj.org/books/takanashi.html>

<http://www.palgrave.com/products/title.aspx?pid=663818>

を参照。

研究代表者の LinkedIn、Facebook でも著書について紹介している。

(研究報告など)

高梨良夫、「エマソンと Spirituality」, 初期アメリカ学会ニューズレター、No. 59、1-2 頁。

Yoshio Takanashi, Emerson's Acceptance in Meiji and Taishō Japan, *The International Association for Japan Studies: Newsletter*, No. 7, pp. 12-14.

6 . 研究組織

(1) 研究代表者 高梨良夫

(TAKANASHI, Yoshio)

長野県短期大学・多文化コミュニケーション学科・教授

研究者番号：5 0 1 6 3 2 2 5